Osaka University Knowledge Archive

Title	Narrating Ghosts : Mourning and Melancholia in Jean Rhys's Novels
Author(s)	杉浦, 清文
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59152
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【9】

氏　　名	杉　浦　清　文（すぎ　うら　きよ　ふみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４８５５　号
学位授与年月日	平成23年６月30日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	Narrating Ghosts: Mourning and Melancholia in Jean Rhys's Novels （幽霊が語ること／幽霊を語ること－ジーン・リースの作品における喪の作業とメランコリー）
論文審査委員	（主査） 教　授　木村　茂雄 （副査） 教　授　伊勢　芳夫　　准教授　小杉　　世

論文内容の要旨

本博士論文では、英領ドミニカ島（現ドミニカ連邦）出身で白人クレオールの女性作家ジーン・リース（1890 - 1979）の作品を考察する。特に詳しく扱う作品は、『カルテット』*Quartet*（1928）、『マッケンジー氏と別れてから』*After Leaving*

Mr. Mackenzie (1930)、『暗闇の中の航海』*Voyage in the Dark* (1934)、『真夜中よ、おはよう』*Good Mourning, Midnight* (1939)、『サルガッソーの広い海』*Wide Sargasso Sea* (1966) の5篇である。リースのこれらの作品は、おしなべて、その当時（または現在）のヨーロッパ、とりわけ英国における男性中心主義、家父長制資本主義、そして植民地主義に根強く支えられた社会で、繰り返しメランコリーに陥っていく女たちに焦点を当てている。そのような憂苦な物語からは、彼女たちに対する悲哀すなわち喪の作業（mourning）の暗澹とした雰囲気を感じずにはいられない。また、このことと関連して、作品のなかでリースが苦悩に打ちひしがれた女たちを表現する際、「幽霊」という無気味なイメジャリーを用いている点も意味深長である。5篇のヒロインたち—マリヤ、ジュリア、アナ、サシャ、アントワネット—は、ヨーロッパ社会の排他的な秩序のなかで、自己の存在意義をまさに生と死の境界線上に置かざるを得ない、まさしく「幽霊」のような女たちだからだ。

これまでの批評は、概して、このようなヒロインたちを「受身的」で「病的」な女性と解釈し、リースの作品が仄めかす社会批判的な要素を封鎖してしまうがことが多かった。こうした批評の背景として見逃せないのは、「メランコリー」（melancholy）を女性特有の精神疾患と診断するフロイト精神分析学の負の影響力である。本論文では、このような先行研究の閉鎖性からの脱却を目指すために、まず、フロイト精神分析学の「喪」(mourning)と「メランコリー」(melancholia)の概念を脱構築的に再検討する。フロイト精神分析学のシナリオにしたがうならば、「幽霊」のような他者との「メランコリック」な交渉を際限なく続ける物語は、人の心的状態を「健康」に導こうとする「喪の作業」の「失敗」を露呈する、まさしく「病的」な作業と解釈される。しかし、ここで注目したいのは、フロイト精神分析学の還元主義的な思考体系を批判し、「喪」と「メランコリー」の二律離反的な区分の境界にかならずや付随する決定不可能性 (undecidability)に焦点を当てることにより、「喪」と「メランコリー」の概念を脱構築的に再考しようとする議論である。というのも、ジャック・デリダをはじめとする脱構築的な視点によれば、「喪の作業」において「メランコリー」に陥った心的状態は、単に「病的」な徴候を示すものではなく、喪失した他者との責任ある対話の倫理的実践をも示唆しているからだ。本論文の目的は、（ポスト・）フロイト精神分析学に影響された既成の概念である「喪」と「メランコリー」を批判的に再考、そして脱構築し、「幽霊」が語る/「幽霊」を語る、リースの5篇の作品を新たな視点から再読していくことにある。

『カルテット』、『マッケンジー氏と別れてから』、『暗闇の中の航海』、『真夜中よ、おはよう』、『サルガッソーの広い海』のナラティブで「メランコリック」に展開されている「喪の作業」は、ヨーロッパの差別的で暴力的な社会のなかで苦境に陥った「幽霊」的な他者——マリヤ、ジュリア、アナ、サシャ、アントワネットを、無責任に忘却することを許さない。つまり、これらのナラティブは、そうした「幽霊」的な他者を絶え間なく想起することにより、未来の解放を約束する「正義」に訴え続けているのである。この点を論証するために、本論文は以下のように議論を展開する。

Part Iでは、小説の舞台が主にヨーロッパに設定されている作品、『カルテット』、『マッケンジー氏と別れてから』、『真夜中よ、おはよう』を考察の対象とする。まずChapter 1で、デリダが指摘する「反覆可能性」(iterability)の概念に着眼しながら、いわゆる「喪の作業」を「メランコリック」に繰り返していくリースの小説にみられるナラティブが、実際のところ、「他者」（itera－other－alterity）との責任をもった交渉の「反覆」(iteration)であるという事実を明確にする。

Chapter 2では、『カルテット』の「幽霊」マリヤを中心に、ランジャナ・カーナが指摘するメランコリーの2つの類型、つまり「心情としてのメランコリー」(the affect of melancholia)と「みせかけとしてのメランコリー」(melancholic affectation)の概念を援用しつつ、作品を再読して行く。総じて、『カルテット』のナラティブは、ヨーロッパ社会における男性中心主義的な思考体系の暴力性とその欺瞞性を浮き彫りにしたものであることを明らかにする。

次に、Chapter 3では、『マッケンジー氏と別れてから』に登場する、ジュリアという「幽霊」に着目する。多くの批評家が指摘するように、この小説ではジュリアの視点から「母なる場」が探求されているといえるが、そうした「場」は、ジュリア・クリステヴァ等のフェミニズム批評が飾り立てるような、どこまでも「純粋無垢」でひたすら「女性的」なものであるとは言い難い。全体的にみて、そのナラティブは、「母なる場」をあくまで父権的・言説的領域の内部から脱構築的に探求することにより、男性中心主義的な象徴的権力の理不尽で陰惨な様相を暴露しているといえる。

Chapter 4では、『真夜中よ、おはよう』の「幽霊」サシャに関する考察を進める。ここでは、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』第18挿話「ペネロペイア」におけるモリー・ブルームの'Yes'と、サシャが最後に発する 'Yes-yes-yes....' との比較考察を通じて、『真夜中よ、おはよう』のナラティブが、家父長制資本主義制度の非人道的な搾取の現実を浮き彫りにしていることを明らかにする。

Part IIでは、白人クレオールの女に付き纏う複雑で曖昧な主体性に焦点を当てた2作品、すなわち『暗闇の中の航海』と『サルガッソーの広い海』を考察の対象とする。『カルテット』、『マッケンジー氏と別れてから』、『真夜中よ、おはよう』と同じく、『暗闇の中の航海』と『サルガッソーの広い海』もまた、ヨーロッパの偏狭な社会の現実を「反覆的」に（iteratively）暴露しているといえるが、それに加えて、両小説は西インド諸島の白人クレオールの視点から、ヨーロッパ社会、とりわけ英国の植民地主義の歴史・文化的背景に、直接的な批判の矛先を向けている点が重要である。

Chapter 5では、『暗闇の中の航海』と『サルガッソーの広い海』で展開される入り組んだナラティブの構造を再考するために、サム・グラントの見解を参考にしながら、脱構築的な「喪の作業」の概念をポストコロニアル批評の観点から再検討する。

Chapter 6では、『暗闇の中の航海』のアナという「幽霊」の考察を行う。そして、西インド諸島の過去を「反覆的」に想起する時代錯誤的な『闇の中の航海』のナラティブが、英国の植民地主義の犠牲者の立場から、その社会の欺瞞性を告発していく一方で、かつてのプランター階級の末裔としての白人クレオールの支配者の立場をも「反覆脅迫的」に浮き彫りにしている点を明らかにする。

Chapter 7では、『サルガッソーの広い海』の「幽霊」アントワネットを論じる。『サルガッソーの広い海』には、最初『幽霊』（*Le Revenant*）という仮タイトルが与えられていたという事実からもわかるように、そのナラティブは、『ジェイン・エア』で不幸な死を遂げたバーサという喪失した他者との不断の対話を果たそうとしている。しかしながら、このナラティブもまた、『暗闇の中の航海』のナラティブと同様に、白人クレオールの女の曖昧な主体性を浮かび上がらせている点を無視することはできない。

以上の考察から、リースの5篇の作品のナラティブで実践される脱構築的な「喪の作業」は、ヨーロッパの形而上学的な思考体系が排除してきた「幽霊」的な他者に責任をもって応答し、そうした思考体系の矛盾と暴力性を「反覆的」に暴露していくという点において、「健全」な社会批判に結びついた「積極的」な行為であることを明らかにする。しかしながら、ヨーロッパの退廃的な社会のなかでもがき苦しむ「幽霊」としての女たちを、ひたすら「メランコリック」に想起し続けていくその「喪の作業」が、やはり極めて苦渋に満ちた行為でもあるという現実も私たちは忘れるべきではないだろう。

最後に強調しておきたいのは、"Narrating Ghosts"—「幽霊」が語ること/「幽霊」を語ること—という一見「周辺的」な問題関心は、私たちの生きるグローバリゼーションの時代においても重要な意味を持ち続けているということである。リースの作品を再読することは、けっして懐古趣味ではない。なぜなら、輻輳した境界線上を彷徨うこれらの「幽霊」たちの物語は、現在のグローバリゼーションの状況において、よりいっそう豊かな倍音を鳴り響かせているといえるからである。

論文審査の結果の要旨

本論文（*Narrating Ghosts: Mourning and Melancholia in Jean Rhys's Novels*）は、カリブのドミニカ島出身の女性作家ジーン・リースが書き著した５編の小説（*Quartet* [1928], *After Leaving Mr. Mackenzie* [1930], *Voyage in the Dark* [1934], *Good Mourning, Midnight* [1939], *Wide Sargasso Sea* [1966]）に描かれた植民地出身の女性たちを、ヨーロッパ的な「現実」から排除された、あるいはその「現実」の周辺に追いやられた「幽霊」的な存在と捉え、そのような存在の意味またそのような存在を語ることの意味を再評価したユニークな研究である。

先行研究においてこれらの女性は、男性社会に翻弄される病的なまでに受動的な存在とみなされる傾向があったが、本論文はまず第１章で、そのような解釈の一つの前提とされている「健全な喪の営み（mourning）」と「病的な憂鬱（melancholia）」というフロイトの二分法を、デリダの観点を援用しつつ脱構築する。そして、第２章以降の緻密な作品分析を通して、これらの女性たちが有する「弱さのなかの強さ」に新しい光を当てて行く。

本論文の優れた点は、まず何よりも、そのテクスト分析が、ポストコロニアル批評の多様な理論的観点と有機

的に結び付けられて展開されている点にある。その理論的観点とは、たとえば、カントの「定言命令」に対する批判（第２章の*Quartet*論）、ラカンの「象徴界」が内包する男性中心主義に対する批判（第３章の*After Leaving Mr. Mackenzie*論）、マルクスを援用した資本主義社会体制の批判（第４章の*Good Mourning, Midnight*論）、そして論文後半の中心となる、西欧近代の植民主義に対する批判（第５章、第６章、第７章の*Voyage in the Dark*論および*Wide Sargasso Sea*論）などである。最後の植民地主義批判に関しては、かつてのプランテーション農場主の子孫としてのリースが抱え込んでいた、屈折したアイデンティティ意識という問題が深く掘り下げられている点も注目に値する。

理論的考察とテクスト分析をバランスよく展開した本論文は、英語で書かれていることもあり、国際的なリース研究にも一石を投じるレベルの研究と評価できる。

欲を言えば、植民地主義の多面性や、リース文学の経年的な変化・展開をより詳細に論じることができてきていれば、それはさらに優れた論文になっていたと言えるかもしれない。しかしこのことは本論文の成果を決して損なうものではない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。